

令和2年度 学校自己評価システムシート (大妻嵐山中学校・高等学校)

目指す学校像	○「世界につながる科学する心、表現する力」を育てるGlobal Eco Science School ○建学の精神「学芸を修めて人類のために」貢献できる高い意識と学力を身につけた女性を育成する学校 ○大妻コタカ先生の教育理念に基づいた人格の陶冶をめざす学校
重点目標	1 世界につながる科学的素養を育てる 2 世界につながる表現する力を育てる 3 世界につながる心と感性を育てる 4 世界につながる進学力を育てる 5 組織的な広報活動を展開し学校の魅力を伝え、入学者を確保する

※学校関係者評価実施日は、学校評価懇話会の開催日としている。

学校評価委員	
・第三者評価委員	4名
・学校関係者評価委員	3名
事務局(教職員)	7名

※重点目標は3つ以上の設定も可。重点目標に対応した評価項目(年度達成目標を意味する)は複数設定可。
 ※番号欄は重点目標の番号と対応させる。評価項目に対応した「具体的方策、方策の評価指標」を設定。
 ※達成度は、方策の評価指標に対する評価。

学校自己評価					学校関係者・第三者評価		
年度目標		年度評価			実施日 令和3年3月13日		
番号	現状と課題	評価項目	具体的方策	方策の評価指標	評価項目の達成状況	次年度への課題と改善策	
1	学力上位層と下位層との開きが大きくなってきていることを踏まえ、個々に応じた個別最適化を目指した取り組みをさらに充実・発展させていく必要がある。そのためにも、教員研修の機会を確保し、授業力向上は喫緊の課題である。 また、グローバル化については、昨年度末からの感染症の拡大により多くの交流行事や海外研修が中止もしくは延期となってしまったが、今後も英検の取得率を高めてコミュニケーション能力を身につけるとともに、海外修学旅行や国際交流の一層の内容充実を図り、異文化理解を進めて世界につながる力を育成する。 こうした現状を踏まえた次の課題に取り組む。 ①個別最適化の充実 ②授業力の向上 ③世界につながる力の育成	①個別最適化の充実 ②授業力の向上 ③世界につながる力の育成	○外部模試、定期考査、学力アセスメント等客観テストの分析と検証 ○学年、教科単位での計画的な課題付与により予習・授業・復習の学習サイクルの確立を目指す ○英検については全員受験を勧めるとともに学年での効果的取り組みを全体で共有して活用していく ○Findアクティブラーナーを導入し、教員個々の授業研究機会の充実を図る ○休業期間中を利用して遠隔授業等ICTを積極的に活用した授業を実施する ○保護者等への公開授業の実施及び教員間での公開授業見学の実施と研究協議の開催 ○管理職による授業観察及び評価面談によるフィードバックの実施 ○国際交流・国際理解の積極的推進→海外留学、海外研修、海外の学校との交流事業、留学生受け入れなど	○学力の底上げが図られたか ○生徒の家庭学習時間が増加したか ○英語検定の取得率が上がったか ○生徒の授業評価が向上したか ○教員研修の充実が図られたか ○遠隔授業等ICTの活用が有効に機能していたか ○国際交流事業等の充実化が行われたか	①個別最適化の充実に関しては、コロナ禍においては十分に機能したとは言えない ・臨時休業中におけるICT環境の整備に年度当初時間を要し、十分な学習指導が行えず、学習習慣の定着が脆弱となり、十分な学力の底上げが図られなかった。 ・在宅によるリモート授業が続く中で、家庭学習の時間は例年以上に顕著な二極化を示し、運動する形で学力もまた二極化が進んでしまった。 ・英検について、今年度は延期や中止などにより取得率は下がったものの、昨年までは着実に取得率が上がってきていることから、グローバル教育の成果としても英語力は着実に着実に向上している。 ・授業力の向上においては、遠隔授業の活用により「教材研究力」の視点から、そのスキルは着実に向上している。 ・オンライン型の教員研修として「アクティブ・ラーナー」を導入してコロナ禍での研修機会を確保してきたが、活用状況から見ると受講教員に偏りが見られた。 ・進路や学習に係るオンライン研修の機会があったものの、特別支援や教育相談など生徒指導及び生徒理解に係る研修機会は少なく、バランスを欠いてしまった。初任者研修では、8回にわたり多くの指導教諭のもとで計画的かつ充実した研修が実施できた。 ・授業力向上の成果発表会及びグローバルリンクス講演会を「生徒の学びを変える嵐山の取組2021」として実施する予定である。 ○世界に繋がる力の育成 ・緊急事態宣言下の臨時休業中においては、在宅によるリモート授業をいち早く実施することができるとICTの活用が有効に機能した。 ・各種国際交流事業のほとんどが、延期もしくは中止となり、代替のものとしてオンラインによるバーチャル体験を実施し、3月にはオンライン交流を予定している。 ・世界に繋がるためには「多様な学問や生き方に触れる」ことが必要であると考え、国際文化研究や探究の時間を活用して卒業生による講話や外部講師による講演など多様なキャリア学習に取り組んだ	C	①自主的学習時間の増加…学習時間及び学力間の二極化については、コロナ禍の中でさらに広がってしまった。学力の底上げは喫緊の課題であり、自主的な学習時間を増やさなければならない。こまめな声掛けなどを前提として生徒の学習意欲を喚起する方策の実践が急務。とりわけ、Classiの活用を通じて今以上に生徒との日常的な双方向のやり取りの機会を多くすることで、教員と生徒間のリレーションを形成し学習時間を増加に転じさせたい ②教員の教育力向上…授業改善に向けた研修については、新たなオンライン研修の機会を確保してきたものの、生徒と担当教員との関係性の悪化、信頼関係の低下等が授業効率を著しく下げた事例が数多く見られた。こうした事例からも、単にティーチングスキルの向上だけでは、授業効率を上げることはできない。ティーチングスキルと生徒とのコミュニケーションスキルやアサーションスキルなど多様な力を教育力として身につけていくことが必要である。また、教員同士が教員の垣根を越えて、互いにその良い部分を学び合う風通しの良い職場づくりも大切である。まずは、定例の教科会議を教科研修に充当することから始めていきたい。 ③世界につながる力の育成…各学年におけるキャリア学習は今後も「探究」として取り組んでいく。今後は、各学年における情報の共有など連携を深めて取組を系統化・体系化して授業効果を高めていくことが必要である。また、国際交流事業及び海外語学研修については、コロナ禍での対応及び代替事業としてのプログラムを構築して提供することが必要である。
3	挨拶は概ねできているが、自ら元気づけ挨拶ができていない。また、身だしなみや時間を守ることについても概ね問題はないが学校環境が生徒を育てる観点からも「あいさつ運動」や「身だしなみ指導」については今後も徹底していく必要がある。昨年度にはSNSに係る課題が見られたことからSNSに関する注意喚起とともに生徒のソーシャルスキルを高めていくことが必要である。 全体的に謙虚で素直な生徒たちであるが主体的な行動力に欠けることもあり、自主的活動を通じた成功体験を積み重ね自己肯定感を高めていくことが必要である。そのためにも次の課題に取り組む ①大妻コタカ先生の教えに基づいた心の教育の充実 ②自主的活動の活性化 ③ソーシャルスキルの向上	○心の教育の充実 ○自主的活動の活性化 ○ソーシャルスキルの向上	○大妻コタカ先生の教えに基づき、礼法指導、道徳教育、論語教育を実施して大妻精神を涵養する。 ○生徒会及び各種委員会を中心としてあいさつ運動、身だしなみ運動を実施する。 ○部活動予算にメリハリをつけ部活動の活性化及び生徒会活動を活性化させる。 ○生徒会行事、学校行事の実施形態の改善を図り、自立心・協働力・コミュニケーションスキルを育成する。 ○多様な交流やボランティア体験の機会を増やし、行動特性としてのスキルを高めていく。 ○本校のメディアポリシーに基づき、SNSに関する防犯指導を徹底する ○「探究」の時間を活用したソーシャルスキルに係るプログラムを計画し実施していく	○礼法指導・論語教育が計画的に実施できたか ○「あいさつ運動」などが定期的実施できたか ○メリハリのある生徒会予算編成ができたか ○感染症拡大の中で生徒会行事及び学校行事の工夫改善が図られたか ○ボランティアなど多様な体験機会が確保できたか ○SNSに係る防犯指導が適切に行うことができたか ○ソーシャルスキルに係るプログラムを実践することができたか	①心の教育の充実 ・礼法指導、論語教育についてはコロナ禍の中にあっても一部予定に変更は生じたものの概ね予定通り実施できた ・あいさつ運動は、生徒会も含め予定通り実施できたが、まだ成果として十分であるとは言えない ②自主的活動の活性化について、指標においては概ね達成できているものの、インテグレートやボランティアなど対外的な活動はコロナ禍の中で縮小せざるを得なかった ・生徒会予算については、実績や活動に応じたメリハリのある予算編成ができた ・コロナ禍の中で対外的な活動としてボランティアなどの活躍の場を広げることができなかった ③ソーシャルスキルの向上 ・SNSに係る防犯指導は行ってはいるものの実効性のあるものと言いきれない。大きなトラブル等は発生していないが今後も地道にリテラシー指導を継続していくことが必要。 ・ソーシャルスキルの育成に関するプログラムについては、年度当初を予定していたものの臨時休業等の影響もあり実施するタイミングを逃してしまった。現状からは、今後もソーシャルスキルを高めることは、大きな課題である。	A	①心の教育については、建学の精神にも係ることであり、学校全体で取り組むべきことである。今後は、現在中学で実施している礼法指導等「心の教育」を高校においても実施し、学校全体に上げていくことが必要である。また、毎朝登校時に行っている健康観察を兼ねた職員によるあいさつ指導でも、生徒のあいさつは、十分とは言えない。生徒も含めた運動として広げ、あいさつを含め「心の教育」を大妻精神の証としなければならない ②自主的活動の活性化に関しては、オンライン文化祭など生徒会を中心にコロナ禍の中において創意工夫を凝らしてイベントを実施してきた。今後は、iPad使用ルールの見直し、サブバッグの自由化など学校生活から日常に及び自律的な態度や姿勢の醸成に向けて自主的活動の工夫と改善が必要である。また、こうした観点からの懲戒規定の見直しも実施していく。 ③ソーシャルスキルの向上については、今後もプログラムの構築に力を入れて計画的に実施していく。一方、職員においては特別な配慮を必要とする生徒への理解や支援に向けたスキルを身につけることが必要である ④その他として「安心安全な学校」の実現のための指導内容についての情報や意識の更なる共有。ICTを活用した活動の更なる研究と内容の充実。緊急時への対応の訓練の充実と、物資・設備の再確認に取り組む。
4	大妻女子大への進学については大妻ゼミの内容充実が図られるとともに入学前の教育プログラムも充実し、入学者の質的向上が顕著となっている。進学実績では国公立の合格が1名と激減するなど難関大学への実績が低下している。国公立志願者は年々少なくなっているものの進路選択においては「行けるところ」にシフトしてしまう生徒も多く盛られ、「行ける学校」から「行きたい学校」へと高い志をもって進路実現を目指すことが求められていることから、次の課題に取り組む。 ①中長期的なライフデザインを考えるキャリア教育の充実 ②「総合型選抜」など多様な入試への対応 ③大妻女子大への内部進学指導の強化	○キャリア教育の充実 ○進路実績の向上 ○大妻女子大への内部進学指導の充実	○総合的探究の時間を活用して系統的かつ計画的なキャリアガイダンスを実施する。 ○進路情報を迅速に発信して、進路指導部を中心とした総合型選抜への確かつ迅速に対応する。 ○模試結果のフィードバックなど客観的データに基づいた学力分析を徹底する。 ○本校のメディアポリシーに基づき、SNSに関する防犯指導を徹底する ○「探究」の時間を活用したソーシャルスキルに係るプログラムを計画し実施していく ○生徒の進路ニーズに対応したきめ細かいサポートを実施する	○キャリア教育が計画的に実施できたか ○総合型選抜への的確な対応ができたか ○難関大学への進学実績が向上したか ○大妻女子大への内部進学者が質的に高まったか	①中長期的なライフデザインを考えるキャリア教育の充実については、卒業生の人材バンクの立ち上げなど国際文化研究や探究の時間を活用して十分実施できた ②進学実績の向上については、生徒一人ひとりの進路希望の実現は図られているものの、残念ながら難関大学への進学実績が向上したとは言えない ・「総合型選抜」など多様な入試への対応については、今年度はコロナによる変更が相次いだものの、この状況下にも関わらず情報感度を高く保ち、大きな混乱もなく受験指導を進めることができた ③大妻女子大への内部進学指導の強化 担任がHR単位で「附属校に進学することの意味」を生徒達にしっかり説くなど、日常的に大妻進学を意識を醸成することで、昨年以上に充実した指導ができた。また、大妻ゼミを中心に生徒達は自覚を持って課題に取り組むことができた。	A	①オンラインツールを利用したキャリア教育の検討 今後もオンラインツールを活用した授業形態は一定期間続いていくと予想されるため、オンライン形式でも生徒にとって有効な内容を検討・実施する必要がある。オンライン、オフライン双方にそれぞれ利点と欠点があるので、ICTの利点と欠点を使い分けたキャリア計画を立てる。 ②前例を踏まえた受験指導…今年でコロナ禍における前例ができたため、次年度はある程度先を想定した動きが取れる。 ③組織間の連携・協力体制の構築…大妻進学者への指導には、学年団の協力体制と担任の自覚が不可欠である。また、国語科による大妻志望者に対する小論文や書類作成等の指導をより効果的に実施するために、国語科との情報交換を密に行っていく。
5	今年度、中学52名、高校130名の入学生となり、当初の目標に対して中学は達成できたが高校はわずかに届かなかったものの対前年29名の増加となり今年度につながる結果となった。また、比企地区の教育委員会の協力を得て各種行事の参加者も増え、広報活動の活性化につながった。 しかしながら、比企地区内からの入学者の減少に歯止めはかからず、今後は地域との連携を強化し、地域からの評価を高めていくことが必要である。 そこで、次の課題に取り組む。 ①比企地区内での連携事業に取り組み、地域のランドマークとしての役割を果たす。 ②本校の教育活動を多面的・多角的に発信する。 ③地域の中学校及び教育機関との連携を一層深める。	○情報発信力の強化 ○入試広報・生徒募集集活動の充実 ○入学定員の確保	○ホームページのリニューアル、学校案内などのパンフレットや説明会等のリーフレットの刷新 ○SNSなど多様なツールを活用した情報発信を行う ○感染症拡大状況の中で動画配信など入試広報事業を実施する ○施設設備の活用など多様な地域交流及び異校種交流を実施する ○全教職員による戦略的な広報事業を推進する ○塾訪問を通して良好な関係性を構築する	○学校パンフレットや各種広報事業のリーフレット等の確かな刷新及び配付ができたか ○多様なツールを活用した情報発信ができたか ○感染症拡大状況の中で的確な説明会等の事業が実施できたか ○多様な形態のもとに比企地区内での連携事業が増えたか ○外回り担当を中心に塾との良好な関係性が構築できたか ○中学50名以上、高校150名以上の入学者が確保できたか ○比企地区内からの入学者が前年度より増えたか	①情報発信力の強化…パンフレットやリーフレットなどについては、配布時期や方法等において概ね的確に配付することができた。パンフレットに関してはデザインは素晴らしいものの内容に関しては、さらなる充実が必要である。 ・情報発信のツールについては、LINEを新たに活用することで登録者数や動画等の閲覧状況に一定の効果を得ることができた。 ②多様なツールを活用した情報発信ができたか ③感染症拡大状況の中で的確な説明会等の事業が実施できたか ・コロナ禍ではあったが、説明会を対面式で実施できない中、動画配信などを他校よりも先手打つことができた。 ④入学定員の確保…中学入試において入学者59名の内訳は、まなび力入試48名、第1回一般2名、第2回一般2名、第3回一般6名、帰国生入試という状況であった。入学手続きは63名であったが、その後他校の繰り上げ等から4名減となる。また「まなび力入試」も倍率1.1倍とし、学力底辺層を取り込まないことへの第1歩も踏み出すことができた。 ・高校入試において単願受験生(入学者)80名は近年において非常に多い人数となったが、併願受験生の数は個別相談件数からみると期待する数値より低いものであった。 ・中学入試、高校入試とも合否判定の合格基準点を例年以上に明確に持つことができた。入学してくる生徒の学力は昨年度よりも高いものである。	A	①情報発信力については、今後もLINEやYou Tubeなどのツールを活用して多面的に情報発信力を強化するとともにパンフレットについては、学校コンセプト及び発信内容などより一層充実・強化させていく ②募集活動の充実…関心は、中学イベントのわくわくワークショップはコロナ禍の実施という点もあり、参加者を多く募ることができなかった。回数と内容を次年度見直ししたい。またその中で6年生向け説明会と低学年向け説明会を分けることができないかも検討していきたい。また、外部の進路相談についても現状では、実施の見通しもつかないところあるため、説明会等の日程スケジュール、形態に工夫改善を図っていく。 ・ホームページと学校パンフレット、また説明会や個別相談のブース装飾などを統一感あるものに整える。 ③入学定員の確保に関しては、中学入試においては奨学生入試の受験者数が年々減少している状況踏まえ、次年度は大妻奨学生入試と形を変え、大妻中学校を目指す受験生が、月に練習を兼ねて活用できるような入試を整えたい。 ・スクールバスの運行路線については常に念頭に置かなければならない。各路線の始発駅、経由駅の検討を続けていく。